
with a crime

yoshina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

With a crime

【Nコード】

N0217G

【作者名】

yoshina

【あらすじ】

犯罪をお供にした短編集。まったりシリアス。グロくともエロくとも無い予定ですが、一応15禁にしました。(精神の衛生上…)
何人かのキャラをちらほら出せたらいいなと思います。(サブタイに登場キャラを表示してみました)

1、足元の地獄（新一・平次）

飛び降り自殺が図られた、高層マンションの屋上に行ってみた。冬の冷え込みはまだまだ続き、屋上も底冷えの風が吹いていた。

「……ここか」

白いチョークで印がつけてある、フェンスの前まで行く。

この真下に、普通の人なら眩暈を起こしそうなほど遠い距離で地上がある。

そこにもより大きな、人型の印が書かれてある。

ここからフェンスをよじ登って、男は「自殺」したという。

その自殺が本人の意思によるものだったのか、もしくは他人の作為的なものだったのか。

それはまだ判明していない。

ただあるのは、男がここから落ちて死んだという事実だけだ。

2

フェンスから四方の高層ビルを見渡した後、平次はどんよりとした雲を仰いだ。

少しだけ何かを考えるような目の動きをした後、帽子を取って丁寧に床に置く。

そして、目の前の網に手をかけた。

がしゃん、と金属音がする。

網目が彼の体重で少しだけ揺れたが、彼は迷うことなく上を目指す。

二メートル程の高さは彼にとっては壁でも何でもなかった。

すぐに登りきり、腕を伸ばして上半身をフェンスの無い空間へと持ち上げた。

より一層、強い風が彼の顔にぶつかる。

凍えるような痛みに近いものが頬を突き刺し、思わず俯いた。俯いたはるか真下には、人型の白い線。

誰かがこの場面を見ていたなら、あまりの危うさに悲鳴を上げたことだろう。

だが平次は、危うさも恐ろしさも全く感じず、じっと目を凝らしてそのまま白い線を見下ろした。

ここから落ちた男は、地にへばりつくその時何を考えていたのだろうか。

彼はそんなことを思う。

生死をさまようような境地は何度か体験したが、まだ実際に死の淵に行った訳ではない。

勿論行く予定も今のところはないのだが、正直関心はあった。

何を思い、人は思考を停止するのか。

停止した後、人はどこかへ行くのだろうか。

天国とか？

地獄とか？

探偵の癖にそんな考え方をする自分を、平次は我ながら不思議に思う。

「何やってんだオメー。俺を自殺目撃者にさせるつもりかよ」

真下を眺めていると、不意に後ろから声がした。

身乗り出したまま振り返る。

東の良き友人が扉に右肩をもたれさせて、こちらに呆れた視線を送っていた。

「そんなつもりは全然無いんやけど」

「いや、つもりが無くてもその状態はやめる。とにかく降りろ」

西の友人の危険な行為に、新一は動じた感は全く無く、ジト目で

命令する。

「それってフェンスの内側か？ それとも外側か？」

それに対し、平次は少しだけ可笑しそうに笑う。

そして笑えない「冗談」を投げかけた。

新一はそんな「冗談」を、どちらかといえばワルに近い口角の上
げ具合で返す。

笑ったといえば、笑った顔だ。

「そうだな」と言って、右の拳を平次に向かって水平に突き出す。

親指を天に向け、そのまま垂直に真下に振り下ろした。

その先にあるのは当然、新一自身の足元。

「こちらに戻ってきてから、地獄に落ちるっていうのもありじゃね
えのか？」

新一の提案は、天国にでも誘いをかけるような軽い口調だった。

2、戦う女子高生（蘭）

芸能界に興味ない、と声をかけられたのは渋谷の町だった。

来週園子とスキー行くための服を買いに、一人ウィンドウショッピングしていた時だ。

蘭は、勿論興味は無い。

以前横浜の中華街で映画関係者に誘われたこともあったが、その時も断っている。

だが、声をかけられてから数時間たった今。

彼女は誘った若い女に連れられて、あるビルの地下の事務所にいた。

即興で作ったと見られる白い壁の一室で、パイプ椅子に座っている。

その前に長机をはさんで、サングラスをかけた髭面の中年男と二十代の茶髪の男が同じく座っている。

男の背後にはスーツを来た年齢不詳の男が三人ほど立って控えていた。

しかししゃべるのは、目の前に座る二人の男だけである。

声をかけた女は机にお茶を置いた後、さっさと出て行った。

何時間にも及ぶ、男からのほめ言葉と契約説明の交互を織り込んだ説得。

蘭はまるで洗脳みたいだなと思った。

「いやー、こんなに可愛い子がこの町にいたなんて知らなかったよ」「背も高いしすらつとしてるし、女優よりも先にモデルのほうで売り込んだほうがいいね」

さっきも聞いた同じほめ言葉をまた口にされて、内心ため息をつく。

それでもこんなところに居続けるのはちゃんと理由があった。

一週間ほど前、彼女が主将を務める空手部の後輩が、今回と同じような声かけをされたのだ。

あまりにもしつこく女がまとわりつき、それでも無視して去ろうとしたら更に別の男がやってきて、二人がかりでどこかに連れて行かれそうになったという。

怖くなった後輩は、男の足を思い切り踏んで走って逃げたそうだが、ただ逃げるだけではなく、足を踏む辺り空手部らしい勇ましさがあるが、やはり恐ろしかったのだろう。

後輩はすぐに警察に届け出た。
それを部活中本人から聞いていた蘭は、今回誘いに乗ったのだった。

後輩の体験談と照らし合わせると、目の前の男達が元凶なのは間違いない。

警察も動いているだろうが、上手いこと気配を消して暗躍しているのだろう。

「じゃあ、この契約書にサインしたらモデルになれるんですか？」

さも興味ありげに、話を自ら進める。

男たちの目に一瞬光ったものを感じたが、それも想定内だ。

親や幼馴染の職業柄、変な知識ばかりが増えてしまったと、彼女は頭の片隅で感じる。

「そうだよ。君ならすぐに雑誌に載れる。見ての通りここは小さな事務所だけどね、君が挑戦してくれるなら僕達も挑戦する。一緒に夢をかなえよう」

そう言ってニッコリ笑い、サングラスの男は茶封筒からA4サイズの紙を取り出した。

契約書だ。

そして恐らく男はこう言っただろう。

蘭は先読みする。

「それでね、君を芸能界に売り込むときにお金がいるんだよ。まずは五十万。何、心配は要らないよ。雑誌に載ればすぐに戻ってくるから。じゃあここにサインをお願いね」

ああやっぱり。

蘭の二度目のため息は内心に留まらず、表に出た。

「すみません、ここまで話していただいて申し訳ないのですが、お断りします」

「あ？」

毅然とした態度で、まっすぐと男二人を見つめ、彼女は先ほどから言いたくて仕方なかった言葉をやっと言った。

すぐに、男達の顔つきが変わる。

やらしいほどにやけっぱなしだった目元が突如険しくなる。

後ろにいたスーツ姿の三人が蘭の背後に回ってくる。

「それはダメだねえお嬢ちゃん。わかる？ ここに来た時点で君は契約するって言うてるんだよ？ それともお金が心配なのかな？」
「だからお金は大丈夫なんだよ。ちよつとの間お金を貸すようなもんさ。すぐに戻ってくるって言っただろ？」

顔は笑ってないが、声だけがまだネコを撫でるような口調だ。

しかし蘭の態度は変わらない。

「でもダメです。すみません」

サングラスの男が堂々と舌打ちをする。
それを隣の若い男が肩を叩いて宥める。

長い茶髪の前髪をかき上げて、まだ口調は甘ったるいまま蘭に言う。
う。

「じゃあ理由を言ってもらわないとおじさんたちも納得いかないよ。お金と言ってからすぐに断ってきたけど……あ、もしかしてお父さんが無職とか？」

その冗談めかした台詞に、蘭は少しだけ眉をひそめた。

「いいえ。父は探偵です」

探偵。

蘭の返事にその場の空気が揺らいだ。

若い男が思わず繰り返す。

「た、探偵？」

「はい、探偵です。ごめんなさい、私妃蘭と言っていましたけど、本当は毛利蘭っていうんです。父は毛利小五郎です」

今度こそ男達に明らかかな動揺が走った。

サングラスの男ががたん、と椅子から立ち上がる。

「ふざけるな！ お前まさか親父の手伝いでここに探りを入れにきたんじゃないやねえだろうな！？」

激しく机を叩き、お茶がこぼれた。

唾がかかってきそうな恫喝だ。

普通の少女なら泣き出すか、怖くて声が出ないだけだろう。

しかし蘭は幸か不幸か、普通の少女よりも変わった体験をしている。

男の本気の脅しを今まで何度も目にしているし、されたこともある。

しかもその全てに屈していない。

「いいえ。私は自分の意思で来ています。大事な後輩を怖がらせたのは誰なのか知りたくなっただんです」

今でも、その後輩は下校の時一人では帰れない。

いつでもどこでもあの時の男が来るかわからない、という恐怖におびえて。

「私はあなたたちを許せない」

そう言い放った時、彼女の背後からぬっと頑丈そうな二の腕が伸びてきた。

肩を掴まれそうになったので、素早く椅子から立ち上がりそのスーツの男の腕をひねり上げた。

男の口から搾り出すような悲鳴が出る。

流れるような動きに、他の男達は驚いて思わず止まる。

その状況を見逃さず、蘭は既にカメラ機能にしていた携帯を片手でポケットから取り出した。

サングラスの男と茶髪の男の顔に向かって、撮影をする。

ぼかんと口を開けた間抜け面が二つ、画面に写り出される。

そして捕まえていた男を、どんと前に押し出した。

勢いでそのまま長机に倒れこみ、そこで男達は我に返った。

「てめえ……!!」

「この写真を持って今から私は警察に行きます。ここで私を捕まえようとするなら、即座にメールで父に写真を送ります」

蘭は写真が添付された新規作成の画面を、男達に円を描いてぐるりと見せる。

携帯を奪う前にボタン一つを押すほうが早いのは明らかだ。

それ以前に、奪おうにも先ほどの体術を見せられた後では、誰もが二の足を踏んで襲い掛かろうとしなかったが。

「でも」

彼女は付け足す。

「私はここからゆっくりと歩いていきます。あなたたちが急いで自首するならそれはそれでいいと思います。……お茶、ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げて彼女は男達に背を向けた。

すると、騒ぎを聞きつけたのか、最初に声をかけてきた女が扉を開けて入ってきた。

中の男達が腰が抜けたような状態に、目を丸くする。

女が呼び止めるまもなく、その横を一礼して彼女は通り過ぎていった。

ビルから出ると、ちょうどすぐに手に持つ携帯が振動した。

メールである。

サブ画面を見れば「新」の文字。

メインを開けて内容を読むと、「今日暇だから夜ご飯食べに行かないか」というお誘い。

そこで蘭は今がすっかり夜だということに気付いた。

上を見上げればネオンがびっしりと夜空を埋め尽くしている。

制服姿の彼女は、その場に若干不似合いだった。

すぐにOKと返事を送ろうとしたが、送信ボタンを押す指を止める。

画面をじつと見つめた後、『私も事件で忙しいの。警視庁で待ち合わせしない？』と打ち直して送信した。

いつもと逆の立場に、少しだけ愉快さと不思議さを感じながら、蘭は歩き始めた。

約束どおり、ゆっくりと歩くつもりである。

2、戦う女子高生(蘭)(後書き)

たまにはこんなのも。

3、偶然の一致（白鳥・高木）

パソコンに次々と浮かび上がる真っ赤な映像に、その場にいた捜査員たちは眉をしかめた。

中には嘔吐く者もいて、白鳥は背後の彼らに「ただ一通り見るだけだから、僕ら二人だけでいいですよ。他の部屋や庭を回って髪の毛一本と残らず見つけてきてください」と行って、逃げ口を作つてやる。

上司の言葉に明らかな安堵の表情を浮かべ、捜査員たちは部屋から出て行った。

彼らは所轄の所属だ。

こんな映像を実際に目のあたりにする機会は白鳥たちよりも少ない。

初めての者もいたかもしれない。

警察とはいえ、気持ち悪いものには気持ち悪いと思って当然だ。

だが、こうやってそんな彼らに気を遣う自分の行動はあまりにも不自然で、白鳥は自嘲した。

そして、隣でそのパソコンの画像を次から次へと浮かび上がらせる後輩を横目にする。

後輩はマウスを使ってカチカチと、パソコンの中のファイルを開けていた。

画像から目を離さず後輩は言う。

「珍しいですね」

「別に、効率的な指示を出したただけだよ。ここで何人もの捜査員が単に被疑者宅のパソコンの中身を拝見するだけなんて、非効率にもほどがある」

我ながら子供染みた言い訳だと白鳥は思ったが、高木は素直に「

それもそうですよね」と頷いた。

「それにしてもめちゃくちゃ多いですよ、画像。全部見るんですか」
「被害者や犯行現場の写っていないなさそうな、単なるホームページからのコピーは飛ばしていつて構わないよ」

「……でもそれって、結局見ないとわからないですよ」
「そうなるね」

その結論に、高木はため息をついて左クリックを連打させ始めた。高速で画像が映し出されていくが、一目で事件と関連があるかを判断して大雑把に一通り全部見ようと思ったらしい。

白鳥もその行動に注意はせず、彼に任せることにする。

画像を正面から見据える彼とは違い、白鳥は右隣から眺めるだけだからだ。

比較的大きな、一軒家の被疑者の部屋でマウスのクリックだけがひたすら鳴り続ける。

全て同じような写真にしか見えない画面をぼんやりと眺め、白鳥は本革のオフィスチェアの背もたれに身を任せた。

隣の書斎から引つ張ってきた椅子だ。

中々の座り心地に、このまま真つ当な人生を歩んでいれば贅沢な暮らしが続いたものを、と彼は思う。

「そういえば、被疑者ってまだ自白してないんですか」

元々この部屋にあったパソコンチェアに座る高木は、そんな彼の心境に続くように問いかけた。

白鳥は気だるく首を振る。

「まだみたいだね。目暮警部がじっくりと時間をかけて陥落させるつもりらしい」

「それは……時間かかるけど絶対落ちそうですね」

犯人逮捕までの段取りより、逮捕後の取調べのほうがはるかにや
り手のベテラン警部の顔を思い浮かべ、高木が苦笑する。

「まあ何にせよ、あの男が犯人なのは明らかだ。名探偵も警察もい
らないくらいバレバレだったからね。何故ああも瞬時にわかってし
まうような犯罪を起こすのか、僕にはわからないよ」

どうせすぐにはれてしまうことを、その時にはばれないとでも思
ったのだろうか。

犯行時の心理は、一般のそれとはかけ離れている。

白鳥は非効率なことを嫌うため、今回の事件も馬鹿馬鹿しいとさ
え感じていた。

背もたれをしならせ乾いた音を出すと、同時にパソコンのエラー
を示す電子音が高く鳴った。

珍しく高木が舌打ちをして、両手でキーを打ち始める。

幾多のフォルダの一つに、ロックがかかっていたようだ。

解除するべく、素人には見慣れないアルファベットの羅列を叩い
ていく。

「被疑者にとつては、非効率であれ、それが一番正しいことだと思
ったんじゃないんですかね」

目の前の怪しいフォルダには言及せず、高木は会話を続ける。

白鳥も気にせず、悠々と重厚な椅子の上で足をクロスさせた。

「正しい、ねえ。最近自分の中の正義と世間の正義のズレに気付か
ない犯人が増えていってるような気がするよ」

パソコンを触り始めてから初めて、高木は白鳥のほづをちらりと見る。

「でもそんなズレがある正義を持つ人たちがどんどん増えたら、その人たちの正義が本当の正義になってしまいかもしれませんね」

白鳥も彼を見返して、右口角を少し上げた。

「洒落にならない未来だ。もしそんな正義がまかり通る世界が来るなら、警察はどんな役回りをするんだろうね」

「うーん、案外、柔軟にその時その時の正義に合った行動をしているんじゃないんですかね」

「じゃあ極論、人が憎いと思う相手を殺すことが正義となったら、警察もその人に代わって相手を殺すのかい」

「無くは無い、と思いますけど」

あくまで個人の意見ですけどね、と付け加え再び高木は画面に視線を戻した。

キーを打ち、ロック解除に専念する。

白鳥は、彼の考えに賛成も否定も感じず、顎に手を当て考える仕事をした。

少しの後、ロックが解除されたことを告げる電子音が鳴る。

同時に彼も顎から手を離した。

「じゃあ、もしそんな正義が今あったとするなら、君もその正義に従うかい」

高木は数分ぶりのフォルダ開封をして、当然のことのように答えた。

「そのときは僕は犯罪者側になりますよ」

左片眉を上げ、白鳥が面白そうに肩を揺らす。

「君も結構チャレンジャーだな」

「そうですかねえ……」

首を傾げつつ高木が画像を開けた。

ロックされてあったので、事件に関わるものかと白鳥は思ったが、出てきた赤い写真はこれまでの画像に比べ、より血なまぐさいものであるだけだった。

単に、お気に入りの画像を大事にロックして誰にも見られないようにしていたようだ。

ため息をつく白鳥に対し、高木はあまり残念がらず次のフォルダに移る。

そしてまた左クリックの連打を始めた。

赤い画像を映し出しながら少しして、「でも」とぼつりと呟く。

控えめのあくびを手を添えて隠していた白鳥は、彼に視線をやる。

「でも、なんだい？」

画面から目を離さず、高木は指の動きだけ止めた。

「僕、時々『偶然』なんだと思うんですよ。今の正義と僕の考えが合ったのって。違う時代に生まれたら、僕の考えは罪になったかもしれない。そしてそれは、今真っ当に生きている人たちにも同じようなことを言えるかもしれない」

真っ赤な画像を前にしながら、彼はどこか遠くを見るように目を細めた。

一方、白鳥はやはり賛成も否定も感じることが出来ず、天井を見上げる。

彼の考えは意外といえど意外だが、かと言って間違ってるとも言えない。

もし自分なら、と想像してみる。

先ほどは冗談めかしたが、自分なら殺人のまかり通る正義の中でも刑事であり続けるだろうか。

それとも、世間の正義に反して犯罪者になって、自分の正義を貫くだろうか。

もし貫くなら、今回の被疑者とどこが違ってくるというのだ。

あの男も、ただ己の信じる正しさを貫いただけかもしれないのに。そこまで考えて、白鳥は思考を即座に停止させた。

この思考の先にある結論に、危機感を覚えたからだ。背筋に薄ら寒いものを感じる。

偶然自分の正義が今の正義と合ってるなら、それでいいじゃないか。

思い込むように、白鳥は目を閉じた。

高木のマウスをクリックする音だけが、ひたすら部屋に響く。

本当に髪の毛一本ありました、と誇らしげに捜査員が扉を叩くのはそれから暫くの後だった。

4、監獄深夜（白馬・平次）

もう何時間くらいが経っただろうか。

いや、一日経っただろうか。

常備している懐中時計が無い今、白馬探の時間感覚は麻痺しつつあった。

真っ暗で湿気くさいコンクリート上の部屋の中で、白馬はゆっくりと天井を見上げる。

あたり一面暗闇だが、天井が意外と近いことが空気でもわかった。

かと言って、立ち上げられる体力も無いのだが。

頭が、まだぐらぐらしている。

見上げたことよって、再び不快感が胃の中から押し寄せるような気分になり、彼は思わず目を閉じた。

本当は手で頭を抑えたかったが、手錠が邪魔して出来ない。

こんな無様な格好、二度としたくなかったのに。

「大丈夫か？」

壁にもたれ座り込んでいる白馬に、更に下から声がかかった。

目を閉じたまま返事をする。

「少し眩暈がしたただけだよ」

「お前が誘拐されたときは、三半規管を狂わせる何かの薬臭がされたんやろうな」

「そうだろうね。どんな体勢でいてもずっと頭がぐるぐる回っていいよ。まあ、君のとどっちが良かったかと聞かれれば迷うところだけれどね」

「俺もやな」

服部平次は仰向けのまま乾いた笑いをした。

と、同時に空気を吸うか細い音が笑いの合間合間に鳴る。

全力疾走した後の、息苦しい呼吸のような音だ。

そしてその音はすぐに咳となり、冷たい床の上で平次は背中をしならせた。

「君こそ大丈夫なのかい。今の状況を正確に判断したいから正直に答えてくれ」

うつすらと目を明けた探は、自分の隣で寝転がる同い年に問う。

探のほうが先にここに連れて来られた為、この青年という時間自体はまだそこまで経っていないのだ。

平次は暫くして咳が収まり、呼吸を整えて答えた。

「右足骨折、わき腹打撲、それによる時折のやや呼吸困難。そんなとこや」

この青年も、同じく手錠を施された手首を腹の辺りに置いている。そのまま探が下に視線を移せば、右足は膝から下が機能的にはありえない方向に向いていた。

暗闇で、言われるまで足の骨折には気付かなかった。

どう考えても、平次のほうが危険だ。

今のところ命に別状は無くても、もし足が複雑骨折をしているようであれば後遺症が残りかねない。

わき腹の打撲も、中の内臓に影響が出ては不味い。

「それにしても、誰なんやろな。バイク乗ってた俺を背後の車からどついて引きずり倒したり、帰国直後のお前に麻薬つばいやつをかがせて気絶させた、きつつい犯人って」

「服部君、無理に話さなくてもいいよ」

「俺が話しかけてるんや。気にすんな」

足元で聞こえる声は、苦しそうだがどこか能天気だ。その能天気さが探には奇妙に思えて、逆に危機感を覚えた。

「……君と同時に拉致監禁、ということとは多分親の仕事関係だとは思うけどね。それ以上はわからない。君は？」

しかし、彼の言葉に甘えて話に乗ることにする。探自身、ずっと気になっていることだからだ。

「同じや。いきなりこんなところ来さされて、何も言わず部屋ん中押し込められたら推理のしようが無いしな。ほんま、この年になってまたこんな羽目になるとは思わんかったわ」

彼の台詞に引っかけかり、探は眩暈のする頭を平次に向けた。

「もしかして、君も何度か”こんな羽目”になった口かい」
「俺がそうやってことは、お前もあつたやろうな」

少しの沈黙。

成り立ってるのかないのか、よくわからない会話の後、二人は互いに苦笑する。

「自分、悪運強いな」
「君もね」

また平次の咳が始まったが、両手が動かさず薬で体も思うように動かない探は、ただじっと収まるのを側で待つ。

一分ほどすると咳は止まり、再び平次は口を開いた。

「服部君、やはりそろそろ」

流石に探はこれ以上は体力温存のためにもいけないと思い、先にいさめる。

だが、平次はかすれた声で言葉を発した。

「よっしゃ、寝るわ」

「え？」

今までとは全くつながりの無い宣言に、探が思わず自分の眩暈すら忘れて前かがみになる。

「ここから脱出しようにも、今の俺らには無理。犯人を特定しようにも判断材料が皆無。でも俺らは悪運めっちゃ強い。ここはもう天に任せて寝るしかないで。それに、もう夜の十二時過ぎた頃やし」

「君、時間わかるのかい？」

「ああ、何となく」

あっさりと平次は頷いた。

野生の勘か、と探は心の中で呟いたが声には出さない。

その代わり、手錠のはまった両手で首もとのネクタイを少し緩めた。

「たいしたものだ。……それでは僕も、少しだけ仮眠を取るとしようか」

「そうしとけ。寝る以外何もできない時間なんて滅多にないで」

彼の言い回しが可笑しくて、右眉を上げる。

「そんなにいつも忙しいのかい」

探は、頭に振動を与えないようゆっくりとずるずる壁を伝って横になる。

伝い方が思ったよりも斜めになり、平次に向かって背中を向けるように頭が床についた。

感覚の麻痺は、時間が経つにつれ強くなるようだった。対する平次は仰向けのまま言う。

「いや、忙しくはないな」

じゃらり、と手錠を鳴らして両手を天井に向かって伸ばす。

バイクから倒された時の衝撃で、体の筋肉が変に縮んでいる。

そこかしこの骨から乾いた音が鳴った。

手錠で拘束された掌を暗闇に差し出したまま、平次は続ける。

「そやけど、寝るといふ行為には夢が伴う。その時点で寝る以外の

ことをしていることになる。やから、」

「結果普段は寝ていない、と？」

「まあそこまでは言わんけど」

しかし彼の言葉はそう意味しているようだった。

探は、先ほどの彼の奇妙さに対する危機感を思い出す。

何でこの状況で、彼はここまで能天気さを貫けるのか。

それは、寝るしかないこの場だからこそなのだ。

聡い彼は平次の今の言葉で、その理由がわかるような気がした。

「じゃあ、今日は寝れるのかい」

探は幾分穏やかな声で問う。

平次は両手を下ろし、やはり能天気な口調を崩すことの無いまま頷く。

「ああ、今日はこんな状態やしな。強制的に寝れそうや」「それは良かった」

そして二人は黙りこくった。

いや、強制的な痛みや不快感によって眠りに落ちた。

次に目が覚めるときは、また服部平次にとって寝れない日々が待っているのだろう。

眩暈すら眠りに侵されながら、探は初めてこの寝れる機会に感謝をしそうだった。

5、それは逃げではない、救いなのだ銃は告げる（佐藤・新一）

「 うん、うん、わかったわ。じゃあそっちは任せるわね」

頑張つて、と付け足して佐藤は携帯の通話ボタンを切った。
隣から青年が顔をひよっこりと出す。

「高木刑事は何て言っていましたか」

「工藤君の推理どおり、米花町の某アパートで犯行グループの片割れを見つけたそうよ」

「そうですか、これであとは目の前の”もう片割れ”を確保するだけですね」

「そうね」

佐藤と工藤新一の目前に広がる黒い集団。

警察の機動隊である。

更にその機動隊の前には某アパートがシャッターを降ろした状態で構えている。

彼らの位置からは伺えないが、向かいのビルからだど、中で武装した男達数人が銃を構えているのが見えていた。

従業員数人を人質にしているという報告が佐藤の元にも伝わっている。

「まさか、ただの殺人だと思ってた事件がここまで発展するなんてね」

「ええ、僕も驚いています」

デパート周辺を囲うように停車してあるパトカーの一台に、佐藤は背中をもたれかけさせた。

三日前担当した殺人事件が、ひよんなことからデパートジャックという聞き慣れぬ事件に移り変わったことに、ある種の感歎の息を漏らす。

「今思えば、三日前すぐに殺人犯を捕まえないほうが良かったのかもしれませんが。予想外の事件で仲間が捕まったことで、犯行グループ全体がこんな大それたことを仕出かすまてになってしまった。僕のミスです」

「そんなことないわ。というより、それを言うなら私達警察のミスよ」

彼の言う殺人犯は女性だった。

同居していた男、この男も犯行グループの一人だったわけだが、に日頃から暴力を振るわれており、先日ついに命の危険を感じて殺してしまったのだという。

これは正当防衛に近い。

しかし、女も男も今まで強盗を繰り返していた集団の仲間だ。

警察に自首するわけにも行かず、結局は捕まえられてしまった。

手錠をかけられたときの女性の手首には、幾多の切り傷が深く刻み込まれていたのを、新一は見ている。

その傷を思い出して、彼は自分の手首を見つめた。

すると、更にその後の光景が頭に思い起こされた。

手錠をはめ、佐藤に促され白黒の車に乗る女が。

「そつういえばあの犯人の女性、パトカーに乗り込んでから何か咳いていませんか？ 僕の位置からでは何を言っていたのかわからなかったんですけど」

新一は自身の手首から、隣の背の高い女性に視線を移す。

当の佐藤はパトカーに背中をくっつけ腕組みをしていた。

彼の質問に、はつとしたように少し目を丸くする。

そして一瞬の間を置き、彼から顔をそらすようにデパートのほうを見た。

思い出すため、というより答えることを躊躇ったような目の動きだった。

「見て見ぬ振りをするなら、最後まで見ぬ振りしてくれれば良かったのに」、だったかしら」

それでも佐藤は答えてくれた。

彼女が躊躇うには十分の答えに、新一もやや驚く。

「見て見ぬ振り、ですか」

「そう。多分、見ない振りしていた人たちと私達がごっちゃになってたんだと思うけどね」

息を吐いて、彼女はパトカーから体を起こし、すつと背筋を伸ばした。

自然と新一より一歩ほど前に進むことになる。

「工藤君は、この言葉聞いてどう思う？」

彼女は目の前のデパートを見上げたまま聞き返した。

その表情は新一からは伺えない。

彼女自身どう思っているのかが、彼には想像できなかった。

真っ直ぐな背中をじつと眺めてみるが、余計にわからなくなりそうだったので、素直に言った。

「さあ……。でも殺人を犯す前から強盗をやっていたわけですし、あまり同情の余地は無いと思います」

何も知らない人間が聞いたら、冷たいと思われそうな意見を新
一は出した。

彼自身その自覚はある。

しかし、真実の前には全ての感情が無になる、という考えを彼は
持っている。

どんなに信じられないことでも、それが真実なら。

今までその理念に従ってきたからこそ、探偵をやってこれたのだ。
その代わり数々の痛みを、伴ってはきたが。

新一は、そんな様々な含みを持った”冷たさ”を目の前の女性な
ら、理解はせずとも否定はしないだろうと思っていた。

「そうね。私も同じ意見だわ」

やはり彼女は同意を示した。

背中越しに、彼女が少しだけ笑ったのが新一にはわかった。

「本当に全く一緒。きっと高木君も同じだと思う」

この場には居ぬ恋人の名を出し、やや柔らかい声で彼女はもう一
度頷く。

「でもね」

しかしすぐにその声は柔らかさから優しい色に変わった。

新一は眉をひそめる。

「あなたは、見て見ぬ振りをしてもいいんだからね」

突如、銃声がデパートから鳴り響いた。
建物を囲う機動隊がすぐに構える。

「……佐藤刑事、」

二人の周りにいた刑事たちも、ざわつき始めた。

そんな中、新一は静かに彼女へ声をかける。

彼らだけそこの喧騒から遠く世界にいるかのように。

彼女も建物を見上げるまま、いつものように動き出しはしなかった。

優しく、優しく言う。

「私達が見るから。だから、あなたは見たくない時は見なくてもいいんだからね」

もう一発、発砲の音がする。

それでも新一はすぐに動かず、ただ相変わらず彼女の後姿を見つめた。

どンドン二人の側を刑事たちが通り過ぎていく。

彼女は否定をしているわけではない。いや、むしろ。

見なくてもいいと言うのなら、今この目の前にある、真っ直ぐで優しい背中を見て見ぬ振りしようか。

新一はそんなことを思いながらついに駆け出した。

自分達よりデパートの近くにいる、目暮警部のもとへ行くべく。

佐藤の側を走りすぎる瞬間、彼女が苦笑気味に肩をすくめたのが、彼にはわかった。

6、ゆるやかに死んでいく私（哀）（前書き）

この短めの灰原のssで終わりにさせていただきます。

マイナーで取っ付き難いものを敢えて書かせていただきましたが、
どれか一つでも受け入れてもらえる話があれば幸いです。

ありがとうございました。

6、ゆるやかに死んでいく私（哀）

よく自虐はするが、自傷はしない。

自傷というのはその文字通り、自分を傷つけることが目的だ。

死ぬためにすることではない。

死んだらその時点で自殺になるじゃないか。

だから、もし自分が自らを傷つけるなら、そのときは自殺する時だ。

哀は、自分でそう言い切れる。

では、今やっているこの行為はなんだろうか。

哀は、目の前にある枯れたひまわりを見つめる。

大きな邸宅での、晴れた昼下がり。

この家の主は外出中だ。

吹き抜けのリビングで、彼女はちょこんとパソコンチェアに座り、萎れた花を手に持つ。

床まで届かない足をぶらつかせながら、ひまわりをかざりと撫でる。

さつきまで、この花は庭でその黄色い花びらを太陽に向けていた。それを、哀はたった今『枯らせた』。

例の薬の実験の一環で、ある薬品を混ぜた栄養剤を茎に投与した。すると、見る見るうちに花は干からび、茎はやせ細っていったのである。

結果としては、実験は成功だ。

ひまわりは成長を早め、最後は枯れていった。

本来ならば、そのまますぐに実験記録をパソコンに打ち込むべきなのだが、哀は手中にあるそれをただじっと見つめる。

この場にあの純粹無垢な少女がいたならどう思うだろう。
悲しむだろうか。

怒るだろうか。

だが、これは計算と根拠に基づくれっきとした実験だ。
もう一人の、かりそめの小学生の男の子を元に戻すための。

とは言え、その男の子にもこういった実験の詳細は話したこと無い。

話したところで、彼が何を言えるわけでもないし、そもそも言えないだろうから。

この家の主は知ってるが、それでも哀は一人きりになった時を見計らって、こういった実験を過去に行っていた。

組織にいたときにやっていたものに比べれば、はるかに生ぬるい実験だ。

繰り返すことになんて、何らためらいは無い。

そつだ、今度は薔薇に投与しよう。

真っ赤な薔薇が茶色く干からびるまでではなく。

真っ黒になった段階で止まるように計算しよう。

枯れる寸前の、薔薇の断末魔をいつでも聞けるように。
そこまで考えて、哀は自嘲した。

「……これじゃあ、実験じゃなくてただの趣味じゃない」

まるで自傷のような趣味だ。

哀は前言撤回を自覚しながら、人間の首を折るかのように、ひまわりの根元を折った。

ちなみに、これは自傷ではない。

茎の成分を見るための行為である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0217g/>

with a crime

2010年10月21日23時09分発行